

日義村の文化財 5

長野県木曾郡お^お玉^{だま}の森^{もり}遺跡

—平安時代後半の集落—

1981・3

長野県木曾郡日義村教育委員会



はじめに

日義中学校改築事業に関連して、給食調理室及びランチルームを併置した給食施設を昭和56年度に建設するという計画がなされ、現校地の東南側に建設予定地が選定されました。ここは、上の原遺跡とともに村内一の大きな規模のお玉の森遺跡に当たります。この遺跡のほぼ中央に日義学校が位置しており、昭和39年校庭造成時に神村透先生が、平安時代住居址7軒を、また、中学校体育館建設に先立つ昭和51年調査では10軒の住居址を検出しています。

これら過去の調査結果からみても、今回の予定地にも当然数軒の住居址が埋蔵されているだろうと推測されたので、学術発掘調査を実施し記録保存を図ることになりました。

今年度は、夏休みに郡下の数町村で発掘調査が予定されており、調査員が重複する可能性もあり7月中に発掘を完了することになりました。

発掘担当を山下生六先生に要請し、村内の社会人、高校生そして日義中学校の生徒諸君の参加で短期間に発掘を行いました。ご協力いただいた皆さんに感謝します。

調査の結果、3軒の住居址を確認することができ、今までの調査分を合せて、この遺跡で20軒の住居跡が検出されたこととなります。出土遺物はかなり多かったが、陶器類ではほぼ完形の皿が1枚であり、他は全部破片のみ、ほかに古銭2枚など若干の鉄器銅器類も発見されました。

遺物の実測、整理とこの報告書執筆は、すべて山下生六先生に担当していただきました。深く感謝申し上げます。

古人が素朴ながら確かな生を営んできたこの地も、次代を担う子どもらの学舎のため次第に開発が進んでいきます。のびのびと育つ子どもらの心に、これら先人の礎により、今日の発達した文化生活が成り立つことを懇切に教える努力が必要であり、私たちは、少くとも調和のある開発を模索し続けねばならないと思います。

昭和56年3月

日義村教育長 今井秀夫

目 次

はじめに

今までの調査	1
今回の調査	2
調査の経過	2
51年度発掘調査と55年度調査の比較図	5
発掘地点実測図	6
遺構分布図	7
各住居・出土品実測図と説明	8
住居出土器一覧表	13
住居以外の出土器一覧表	15
グリット別出土品分類表	16
写 真	
発掘現場	17
各住居址	18
住居址出土遺物	21
各グリット出土遺物	27
調査の結果	35
発掘調査団写真	38

調査について

1. 今までの調査

日義小・中学校のある附近一帯は「お玉の森」と呼ばれ、木曾義仲の四天王の一人樋口次郎兼光の屋敷があったと、伝えられている。

この附近は遺跡地として早くから知られており遺物の散布も多く、縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、歴史時代の灰釉陶器・緑釉陶器の出土が記録されている。この遺跡の調査は今までに、6回行われている。

- 第1回の調査（昭和36年）長谷川悦夫氏により下町の水道工事の際山麓で、縄文中期加曾利E期の住居址。
- 第2回の調査（昭和37年）神村透氏により、宮越区の水道工事中、縄文中期加曾利E期の住居2軒、平安時代住居址4軒が確認され、縄文時代住居址1軒が調査された。
- 第3回の調査（昭和39年）神村透氏により、日義小中学校の校庭が作られた時、急いで調査が行われ、平安時代住居址7軒の発掘調査と、4軒の住居址が確認された。
- 第4回の調査（昭和47・49年）青沼博之氏により、日義村学校配水池築造予定地で縄文中期加曾利E期の住居址1軒が発掘調査された。
- 第5回の調査（昭和52年）神村透氏により、日義小中学校体育館建設予定地の全面にわたり、大規模な発掘調査が行われた。
その結果、10軒の平安住居址が発掘調査された。
- 第6回の調査（昭和53年）神村透氏により、中部電力資材置場建設地の発掘調査が行われ、縄文前・中期の遺構が確認された。

以上の調査結果から、遺物の上からは、縄文早・前・中・後期の土器、石器類と、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、わずかではあるが、中近世の陶片がある。分布から見ると、山麓の沢ぞいに並んで縄文の遺構があり、中央部には平安時代の遺構が散在している。弥生時代と古墳時の遺構は発見されていない。

（日義村文化財2の報告書を参照されたい。）

2. 今回の調査

昭和55年度に、日義小中学校の校舎改築が行われることとなり、更に56年度に給食棟の新築が予定されているため、予定地附近の調査を行うこととなった。

第5回の調査で、体育館建設予定地の発掘調査が実施されたが、現在立派な体育館が完成している。ちょうどこの体育館の南側にあたり、前回の調査地のつづきの桑畑で、現在牧草地となっている畑である。

日義村教育委員会では、工事に先立って急いで、7月に発掘調査を行った。

時期が7月であり、教育会関係者および学校職員、中高校生徒の参加が望まれず、王滝村崩越遺跡の発掘と重なったため、村内の有志と、途中より地元出身高校生の参加によって発掘を実施した。

調査事務局 日義村教育委員会 教育長 今井秀夫 事務局 三沢章也・田中茂
川上清人

調査団 団長 山下生六 調査委員 千村喜万夫 長谷川悦夫

団員 田中健治・田中穂積・征矢隆一・川上利一・市 林弥・中島亭・三沢
康幸

調査協力 地元木曾山林高校生徒有志・木曾西高等学校地歴部有志

調査指導 前回の発掘団長神村透氏（上松中学校教諭）には、直接関接に指導を受けた。

短期間のあわただしい調査であったが、日義小中学校には用具の保管その他について全面的なご協力をいただき、特に感謝したい。

3. 調査の経過

6月発掘調査のための現地調査、写真撮影、発掘計画の打ち合わせを行う。

7月20日、検土杖によりボーリングを実施、体育館よりの北半分は、黒土と褐色土で住居址があるとすればこの面である。事実この面で三地点住居址と思われる地点を確認した。南半分は、人頭大の小石や礫が多く検土杖も深く入らない地点が多く、住居址の存在は無いと思われた。

7月21日、写真撮影と、測量を行う。牧草を刈り取り、ブルドーザー・ユンボによる

表土積み上げ場所の決定。

7月22日、ブルドーザーとユンボにより、表土をはぎ積み上げる。

大型ブルドーザーで自重があるので、はぎ取ったあとが大変固くなる。ユンボの場合は、深く掘るので注意が必要であった。

予想通り北半分は、黒土と褐色土でほとんど石もない状態で、南半分は礫層であった。

7月23日、前回と同じに3メートル四方のグリットを設定し、杭打ちを行う。

西側よりABCの順に列を定める。東側H5、H6を教育委員会関係者で発掘をはじめめる。

7月24日、雨天のため発掘は行われなかった。

7月25日、本日より発掘開始となる。参加者は発掘にはじめて参加する人が多いので、本遺跡の概略と、発掘についての留意点説明。

H5・6・7・8とG5・6・7・8グリットの発掘を行う。

H5・G5グリットは住居址であることが判明、体育館敷地で17号住居まで発掘調査されているので、18号住居址と呼ぶことにする。灰釉陶片の出土が他にくらべて多い。H7とG7グリットで、長方形の遺構が出土、方形墓かもしれない。

7月26日、昨日につづいてF列のグリットの発掘にかかる。東西6グリットの線で、黒土面と小石礫面と大きく二分されていることが、明白になってきた。

出土遺物も18号住居址が多く、他は少量でいずれも灰釉陶片で、完形品はない。

18号住居は、意識的に何等かの理由で石を投げ込んだと思われ、石が多い。

長方形の方形墓と思われる地点は、炭が多く出土し、元豊通宝銭1ヶが発見された。午後時々立となり後本降りとなり4時発掘中止する。

7月27日、本日地元の中学生の参加者もあり発掘もはかどる。グリットの第10列は、盛土が多く発掘はできない。この附近から7・8列は小石礫が多く発掘が手間どり、出土品も少ない。縄文の斧や土器片がわずかではあるが発見される。

グリットE列とD列の発掘を行う。E2から灰釉陶器片出土多し。

18号住居中の石をとり上げる炭が多くでる。一部床面まで掘さげる。爐は発見されない。

7月28日、E2の陶片の多く出土した地点は、住居址であることがわかり、19号住居址とする。この住居址は北側は中学校体育館土手となっており、住居の半分程度しか発掘できない。D列につづいてC列、B列の発掘を行う。D4・C4グリットで、住居址

らしき地点がみつかる。ブルドーザーによりかかれているので、縦穴の側面がわからず、わずかに爐址により20号住居址と判断する。

各所に円形のピット（穴）が発見されるが桑の根株の抜根した址である。

7月29日、南北の断面を実測する。18号住居完全に掘り上げ実測をする。嘉祐元宝1枚と使用不明の鉄器（木曾で木材に印を、引かき刻む道具に似ている）がここで発見された。

20号住居址附近から鉄碇（矢尻）1本が出土した。

19号住居とB列の発掘を重点に行う。

7月30日

19号住居の半分を掘り上げる。住居の東側部分にカナクそをとともなう爐址があり、手前の床面は一段と低くなっており、鍛冶屋場ではないと思われる。

C3・B3グリットから不規則な形をしたピットが発見されたが出土品もなく、後世に畑など耕作中に作られたか、木の根株のあつたあとか判然としなかった。

A列のグリットは、雨のため掘るのに苦労が多く黒土層が深いわりに、遺構は発見できなかった。現在の校舎下には遺構はあるものと判断された。

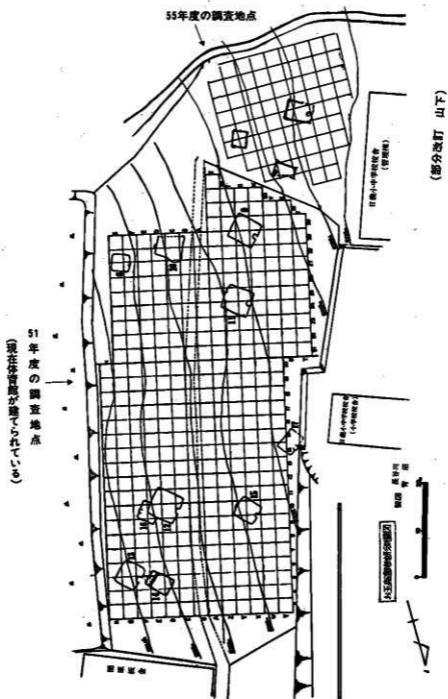
7月31日、残されたグリットの発掘調査を終える。

19号住居址の実測と20号住居址の実測を行い、記録する。

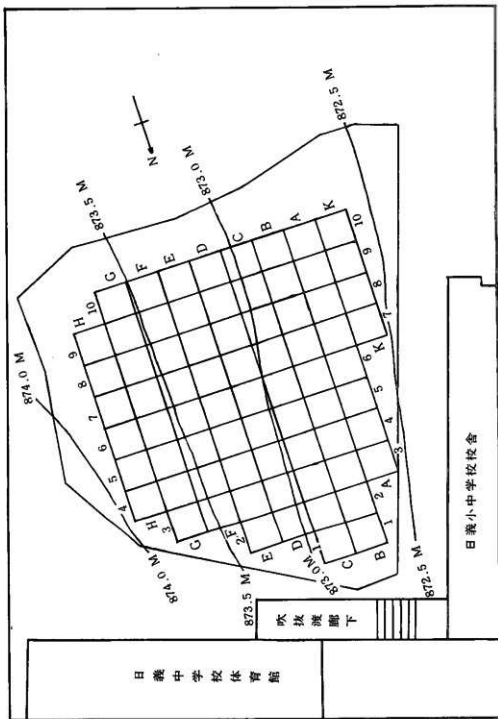
テントの撤去、道具などの後片づけをし、発掘を完了。今回掘られなかったグリットは、10列とK列であった。

その後、遺物の整理記名、分類、写真撮影が行われた。

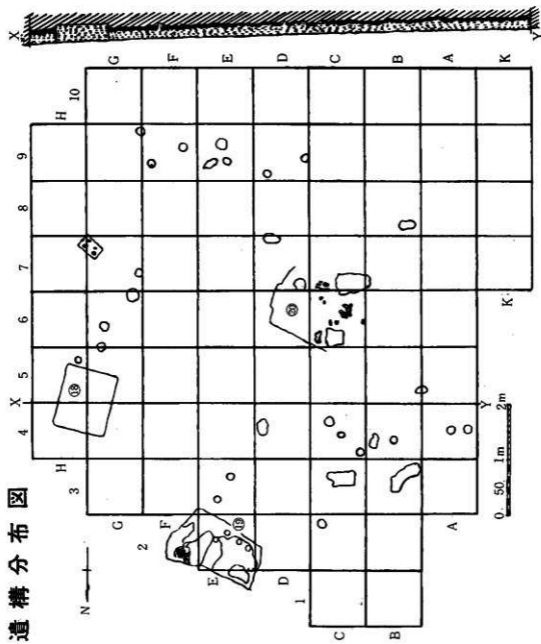
51年度の発掘と55年度の発掘比較図



发掘地点实测图

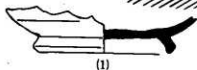
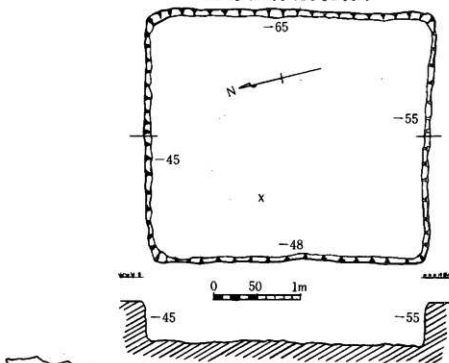


遺構分布図



各住居・出土品実測図と説明

18号住居址実測図



(1)

(すり鉢底)



(2)



古 銭

(嘉祐元宝)

鉄製道具
(カッキリのみ?)

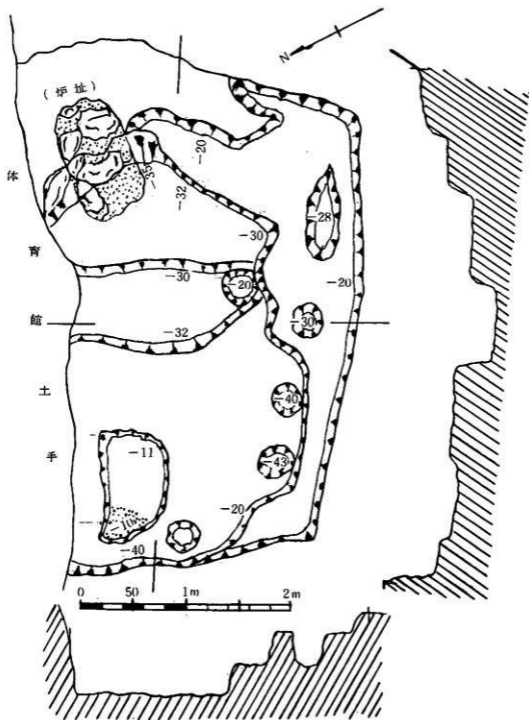


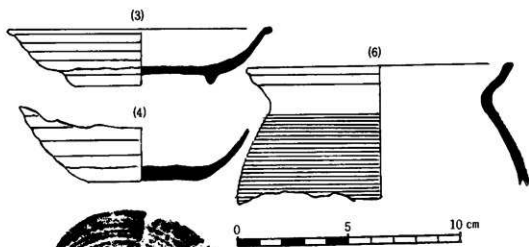
18号住居址は、南北にやや長い長方形の住居址で、炉址も柱穴もない。

したがって、貯蔵庫か倉庫と思われる。出土陶器に完形品は一つもなく小破片ばかりであった。図版(1)はその中でも大きい方である。

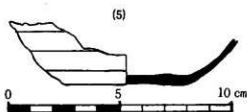
X地点の床上20cmの地点で、鉄製の道具(11)と古銭嘉祐元宝(12)が発見されている。写真図のように投石が多かった。

19号住居址实测图





4のうら



5のうら

5のもじ

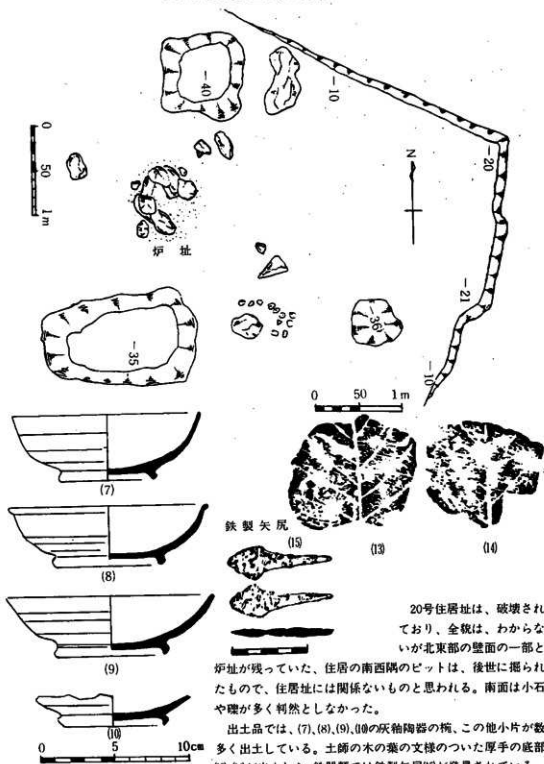


19号住居址は、鍛冶屋場と思われ、段差のある住居址である。残念ながら中学校体育館の土手となっているため、半分の発掘であった。フィゴのあったと思われる炉からは金クソ0.195gが発見された。灰釉陶器の皿(3)は、本発掘唯一の完形品である。土師では(4)の椀、櫛目の横線の入った壺(6)の底部をのぞく一個体分が出土した。

須恵器では、大形の甕の一部分も出土したが、薄手の小椀の底に出の文字の書かれたもの(5)が発見された。

完掘されれば、鍛冶屋場の遺構が、発見されたと思われるが、残念であった。

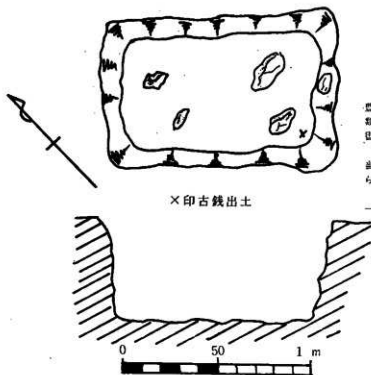
20号住居址実測図



20号住居址は、破壊されており、全貌は、わからないが北東部の壁面の一部と炉址が残っていた、住居の南西隅のピットは、後世に掘られたもので、住居址には関係ないものと思われる。南面は小石や礫が多く判然としなかった。

出土品では、(7)、(8)、(9)、(10)の灰釉陶器の柄、この他小片が数多く出土している。土師の木の葉の文様のついた厚手の底部(13)、(14)が出土した。鉄器類では鉄製矢尻(14)が発見されている。

H 7 長方形土構実測図



×印古銭出土

(16)



元豊通宝

大変粗悪な銭である。

銘銭（びたせん）の仲間である。

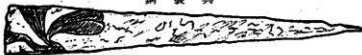
鎌倉・室町期に元の文字のつく銭には元豊、元祐、元符の三種ある。その中の一種類で他に字体の異なるのがあり、これは行世体である。

元という意味は、元の国の元ではない。当時渡来銭一文に対して、九州あたりで作られたこの銘銭は四文であったといわれる。江戸時代には使用禁止となっていたが、一部貿易銭としては使用されたという。

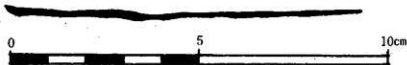
説明の1

H17グリットの長方形の土構は、土構墓と思われる。元豊通宝(16)が出土し、木炭も多く見られた。他の遺構と同じに、石が投げ入れられていた。

鋼製具



(17)



説明の2

G9グリットで発見された鋼製具で何に使用されたものか不明である。前部は欠損してない。飾具の一部ではあるまいか。

18. 19. 20号住居址出土器一覽表

●最近灰輪陶器を白瓷と呼ぶが、本報告書は灰輪として記してある。

図版	住居	品名	口徑	底徑	高さ	現存	器形	産藏	使用すれ	施	輪	胎土	色調	焼成	その他
1	18住 H5	灰・瓶	7.9	7.9	1/5	あり	高台が外へわすかにそっている。		あり	鮮毛刷りで刃味をおびた輪面がかかっている。	細	細	灰	良	
	"	灰・皿	7.1	7.1	1/10	あり	高台が外へははっている。底でよくわからない。	赤切り瓶が、残っている。	あり	内腹上部のみ輪飾。	密	灰	灰	中	底部の小片
	18住 H4	灰・皿	8.2	1.8	1/6	あり	口縁部が外側へわずかにそっている。	平底の赤切り底である。	あり	内腹上部に褐色がかつた輪飾が、外腹にはない。	寛	灰	黄	中	小皿である。
	19住 H5	灰 おろし皿	7.3	7.3	1/6	あり	底部の残欠でまるみ目が縦線につけられている。	平底の赤切り底である。	あり	わずかに底縁あとが残っている。	細	灰	灰	良	
2	"	掘すり鉢	12.2	12.2	小部分	あり	3-4cmおきにすり溝がつけられている。	平底の赤切り底である。	多用	外側に茶褐色の輪飾がある。	白	内	内	中	大型のすり鉢
	18住 H4	掘すり鉢			小部分	あり			"	内外共に赤褐色である。	黄	内	内	中	中型のすり鉢

●18号住居址からは、上記の外に須恵器の縦6cm、横5.1cmのつまみのついた、楕円形の再利用をしたと思われる小さな器のよだが、発見されている。右瀬戸らしき陶片と、天目茶碗の黒褐色の陶片が二点出土している。
灰輪陶器の底部の小破片(皿、碗類)も6ヶ出土している。

3	19住 E2	灰・皿	11.7	6.2	2.5	充	口縁部が外側へわずかにそっている。	小きな焼き穴あり	あり	灰輪わずかに上部に内面むらなく施輪されている。つやあり。	密	灰	灰	良	小部分欠けているがほぼ完形である。
	19住 F2	灰・皿	6.6	6.6	1/6	あり	"	へらで整形してある		内面むらなく施輪されている。つやあり。	やや粗	灰	灰	中	
4	19住 E2	土・瓶	5.4	5.4	1/3	あり	高台はなく勝手つくくりで2-3mm	平底	あり	施輪はない。黄褐色の石あり	粘	土	黄	粗	濃い作りでわれている。
	"	土・瓶	5.7	5.7	1/8	あり	"	赤切り底	あり	"	"	黄	黄	粗	小 残欠
	"	土・瓶	11.0	6.6	1/6	あり	口縁部が外へわずかにそっている。	赤切り底	あり	内腹を厚く塗り仕上げ、つやがある。	粘	土	外	粗	この種の文様のある土器類は本品のみ。
	"	土・器	12.8		1/4	あり	勝手につくくり部がくくれている。全面に磨目状の輪飾がある。	平底	あり	施輪はない。口縁部に灰化物付着。	粘	土	灰	粗	

原居 住居 フリット	器種	口径	底径	高さ	残存	器形	底痕	底蓋	使用すれ	地	輪	胎土	色調	焼成	その他
5	19住 E2	須・碗	5.5	4.2	$\frac{1}{4}$	1.5~2mmの薄手の作り で底台はない。小形で ある。	平底・赤印り 出の文字あり	あり	なし		粗小粒の 石をふくむ	灰白色	中	欠けている文字は出 と判読される。	
	19住 E2	須・碗	(17.8)		底部	1~1.2cmの厚手で、よ うしたときしめである。	平底なとき しめである				小砂粒を 含む	灰色	良	大形と思われる。	
	"	須・壺	(12.1)		底部	厚いつくりで高台があ る。	高台は太い				小砂粒を 含む	外赤褐色 内灰色	良	角底から強と判断。	
	"	"			上部 のみ	口縁部の下方の窪みで 口縁の傾斜が一本入っ ている。					赤褐色 内灰色	良	小さい1片である。 同じ焼きは他にない。		

●19号住居址は、中学校体育館の土手に残しているため、住居は半分のみが発掘であり、したがって出土品は少ない。竪治屋址と思われる。

20住 D6	灰・碗	12.7	6.6	4.2	$\frac{1}{3}$	内側におわずかに丸くそ っている。口縁部整形	赤切蓋	あり	内側上部のみ地物	ち密	灰白色	良		
20住 "	灰・碗		7.6		$\frac{1}{3}$	底部のみで全形は不明	赤切り		地物上層わずか	小砂粒を 含む	灰白色	良		
20住 "	灰・碗		7.4	3.8	$\frac{1}{5}$	わずかに内へむかい丸味 をおびている。	赤切り	あり	乳白色の地物が上部に みられる。	ち密	灰黄色	良		
20住 "	灰・碗		7.5		$\frac{1}{5}$	底部小片でよくわから ない。	赤切り	あり	緑色をおびた灰物が、 かけられている。	粗い	灰黄色	中		
20住 C6	灰・皿	13.3	4.5	2.5	$\frac{1}{3}$	口縁部わずかに内むき。	口縁部整形	あり	朝毛ぬりあとがある。	#	内赤褐色 外灰色	中		
20住 "	灰・皿	11.0	6.9	2.7	$\frac{1}{3}$	口縁部わずかに外むき に開く。	"	あり	灰物のたれがみられる。	草茎を おびている	内灰色 外白色	粗		
20住 "	灰・碗	12.1	6.6	4.0	$\frac{1}{3}$	口縁部やや外へさる。	赤切り	あり	灰物は内側上部にみら れる。	やや粗い	灰色	良		
20住 "	土・壺	(13.3)			$\frac{1}{4}$	無文で底は厚い作り、 深い首がつけられ、口 縁部は外へむいている。	平底で水の 溜まるあなが ある。	あり	なし	無文	粘土	黄褐色	良	底に木の葉をしいた 文様がっている。
20住 "	土・壺	(14.8)			$\frac{1}{3}$	#	平底	あり	なし	無文	粘土 細砂粒	黄褐色	粗	
20住 "	土・壺		7.9		$\frac{1}{5}$	小片につき全体像は明 断できない。	平底	あり	なし	無文で 底台あり	粗い 粘土	#	中	水にかけたこげめが ついている。

●20号住居址は、ブルトーザーにより住居の一部欠き取られていたため、全容ははっきりしないが、出土陶器類は多く、上記以外にも、灰焼陶器の底部が大部分が残っているだけの碗や皿は、6点を数えることができる。

住居址以外のグリット出土器一覧表

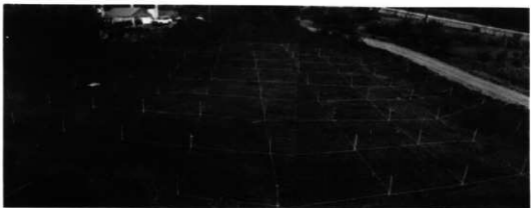
グリット		グリット	
A 4	灰輪平底赤切り底の小片 2 須恵 3	D 9	灰輪平底赤切り小片 1 大平鉢破片 1
A 5	縄文土器小片 1	E 4	灰輪底高台つき小片 2 須恵底小片 1 他
A 6	灰輪底径7.5cmの破片 1 同じく灰輪の底部 2 土師の筒底径7.1cm赤切底 内側は黒色に仕上げの残欠 1 同じく土師の底 2	E 5	灰輪底部 1 他10 天目茶碗片 1 古瀬戸 1
	須恵の小片 1 天目茶碗の小破片 1	E 6	灰輪底部 2 他18 須恵小片 3
A 7	灰輪底部 2 縄文土器底部 1 他 1	E 7	灰輪平底赤切り 1 須恵首破片 1
A 8	灰輪底部 1 他 9 縄文土器 1	E 8	灰輪小破片 3
B 3	須恵破片10 うち 1 口縁部	F 3	灰輪底径7.4cmの小片 1 灰輪底破片 1 須恵片 1 縄文片 1
B 4	灰輪底部 2 他須恵口縁部 1 古瀬戸小片 1	F 4	灰輪底小片 1 縄文土器片 2
B 5	灰輪小片のみ 縄文石斧 1	F 5	灰輪底小片 1 縄文片 1
B 6	灰輪底部の小片 2 他 土師底部 1 他 (内部黒色仕上) 須恵底部小片 1	F 7	灰輪底小片 1 すり鉢小片 1
B 7	灰輪底 1 他の底 1 油皿小片 すり鉢小片 1	F 8	灰輪底径5.1cm 1 同じく底小片 1 すり鉢小片 1 天目茶碗片 1
B 8	灰輪底部厚手 1 点縄文中期土器片 青磁・白磁は近世のもの	F 9	灰輪小破片 2
C 3	須恵小片 1 他 1	G 6	灰輪小破片 2
C 5	灰輪片 6 すり鉢小片 1	G 7	灰輪平底赤切り小片 1 他小片 3
C 7	縄文土器 1 ナイフ 1 近代青磁 1	G 8	平底灰輪底部 1 厚手すり鉢底 1 他 3
D 3	灰輪片 1	G 9	灰輪底 1 おろし皿片 1 すり鉢片 1 古瀬戸片 1 縄文片 1 他
D 4	灰輪底径7.3cm 1 他に底部 2 他に小片11 土師小片12	H 6	灰輪底径7.5cm 1 他に底片 2 (黄色の粘土)
D 5	灰輪底部 1 小片11 すり鉢片 1 現代陶片 3	H 7	灰輪片 1 江戸梅鉢 1
D 7	灰輪平底小片 (赤切り) 1	H 8	縄文中期土器片 1
D 8	灰輪破片縁がかっている。 2	表 採	灰輪底片 1 他に 7 須恵片 5 土師片 1 黒曜石片 1



発掘現場（体育館左前の畑）



ブルドーザとユンボによる表土取り



グリットの設置（3 m×3 m）校舎側から西方へ撮す

18号住居址

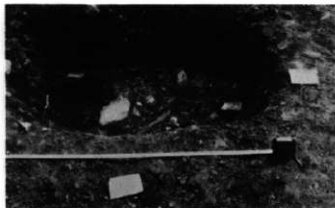


20号住居址は意識的になんらかの理由で投げ入れられたと思われる石が多くあった。



掘り上げられた住居址には柱穴も見られず、炉址もなく、物を保管する貯蔵庫か倉庫と思われる。

H 7 の土構



隅丸の長方形のこの穴は、土構墓と思われ、木炭と古銭元豊通宝が一枚出土した。

19号住居址



体育館土手のため、半分だけ発掘された。段差のある住居址で、鍛冶屋址と思われる。

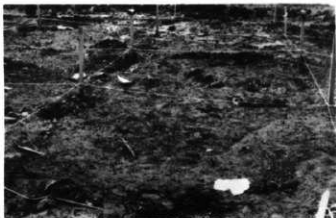


住居の西側に作られていた鍛冶用の炉
赤く土が焼け、石でつぶされた炉址から金クソが出土した。

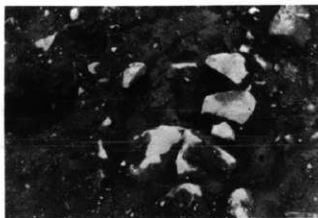


灰釉陶器（白瓷）
の出土状況
今回の発掘では、
完形品は左写真
だけであった。

20号住居址



畑の耕作やブルドーザによって破壊されていたので壁などはよくわからなかった。



東側よりに発見された伊址
焼け石、赤く焼けた粘土があった。

各所で見つかったピット（穴）



以前桑畑で桑の大木があったので今回の発掘では、各所にこのような抜根穴があった。

住居址の出土遺物



18号G4



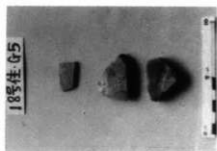
18号H5



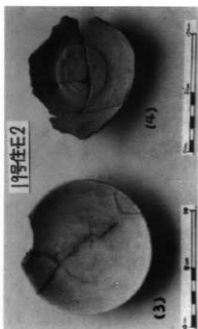
18号G4



18号H4



18号 G 5



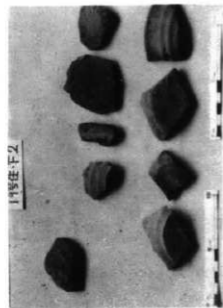
19号 E 2



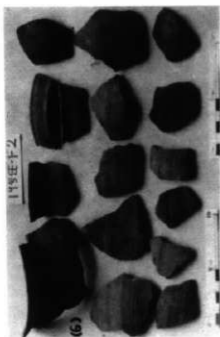
19号 F 2



19号 E 2



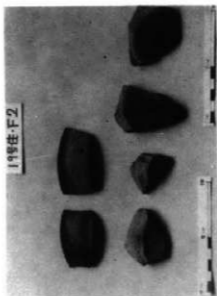
19号 F 2



19号 F 2



19号 F 2



19号 F 2



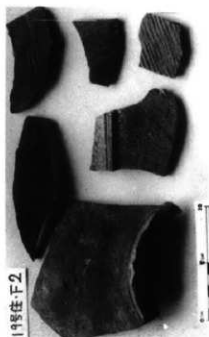
20号住 C6

20号 C 6



20号住 C6

20号 C 6



19号住 F2

19号 F 2



19号住 F2

19号住 D2

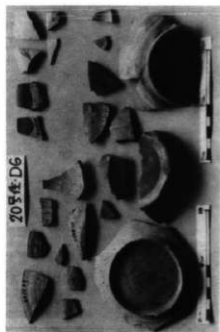
19号 F 2 · D 2



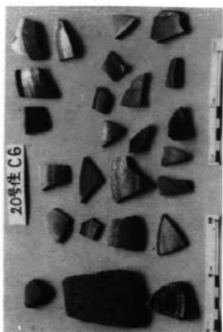
20号 C 6



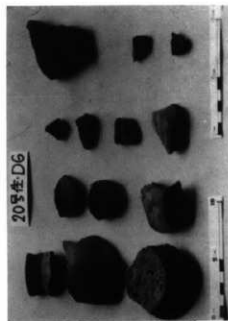
20号 C 6



20号 D 6



20号 C 6



20号 D 6

鉄器類



鉄片・古銭



金クソ



鉄製矢尻

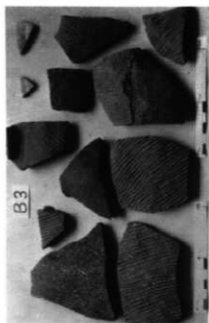
各グリット出土遺物 (住居址はのぞく)



A 4

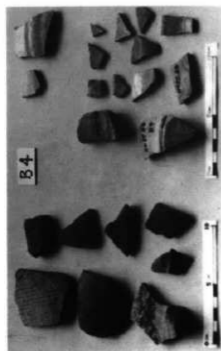
A 5

A 8

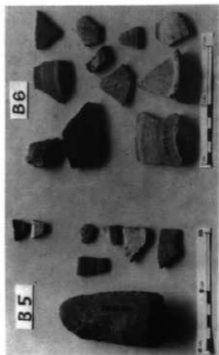


A 6

B 3

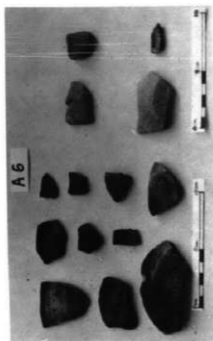


B 4

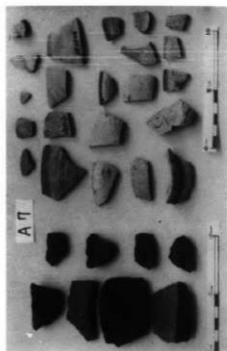


B 6

B 5



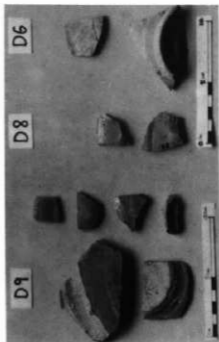
A 6



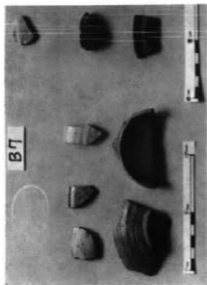
A 7



D 3 D 5



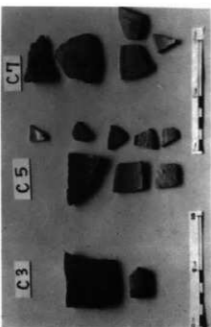
D 6 D 8 D 9



B 7



B 8



C3 C5 C7

E4



D4



E5



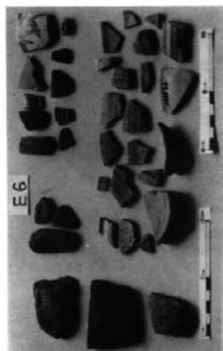
F4

F5



F7

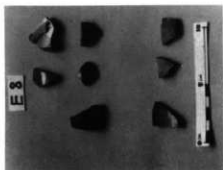
F8



E6



E7



E 8

E 8



G 6

G 6



F 3

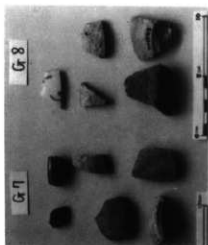
F 3



G 7

(15)

古錢



G 7

G 7

G 8

G 8



表 採



H6 H7 H8



G9



G9 (17)

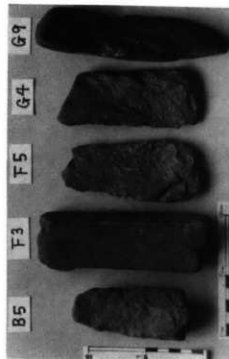
おろし皿とすり鉢片



18号住 H5

18号住・G4

縄文中期打製石斧



B5

F3

F5

G4

G9

(この二枚の写真は重複している)

調査の結果

1. 住居址から

今回の発掘では、18、19、20号の住居址を確認できた。19号址は中学体育館の土手となるため、半分の発掘調査であり、20号址はブルトーザによって、欠き取られていたの外壁などは、不明の部分が多かった。完掘されたのは18号址の1軒であった。

18号址には長方形の住居址で、自然埋設ではなく、意識的に埋められたものと思われ、人頭大の岩石を投げ入れてあった。特に東南部には岩石が多かった。

四隅に柱穴もなく、他の住居址のように炉址の存在も確認できなかった。したがって屋根だけをふいた、貯蔵庫か倉庫のような建物址と思われる。

19号址は、住居内に段差があり、金くそをともなった炉があり、意識的につぶしたようにやはり人頭大の石が投げ入れられていた。この場所は、フィゴのあった場所と思われる、現代でもそうであるようにその手前が一段と低くなっていた。柱穴は五ヶ発見されている。その中の一穴は、フィゴ場に近く、焼き入れの水を貯水した穴ではないかとも想像された。半分の発掘で全体像をつかむことはできない。

20号址は、北壁と西壁の一部をつかむのみであったが、焼石、焼土の残った炉址があり、前回の発掘で見られた、本お玉の森遺蹟の多くの住居址と同じ作りである。

2. 発掘全面から

本遺蹟のグリットH6からA7を結ぶ東西線の、北側はローム層上に黒褐色の層があり、その上に黒土層があり、小石や礫はまったくない。それに反して南側は、ローム層上黒褐色層中は、小石や礫が一面に存在し、上部の沢より押し出された面であると思われる。住居址もこの面からは発見できなかった。

各所にビットが点々と、発見されたが、本遺蹟は最近採草地としたが以前は、桑畑で桑の木の大き木が植えられていたので、この大木の抜根した跡の穴と思われた。事実穴の下方は、細くなり根の痕跡が残っていた。

G7グリットでは、長方形の土構が発見された。やはり石がつまっていたが、木炭も混り、元豊通宝の古銭が出土した。土構墓とも思われる。

C3グリットでは、くの字形の土構が発見されているが、使用目的は不明である。

この土構ピットからは、灰釉陶器・須恵器片も出土しており、意識的に掘られたものであることは事実である。

D4の土構も同様に考えられるが、C3は桑の根か、後世に畑作業で掘られたものである。

C7のピットは、20号址に近い場所であるので、なんらかの関係があるものかと考えられたが浅く、出土品もなく、やはり後世のものと思われる。

10列とK列は、盛土のため発掘することができなかったが、10列には住居址などの存在は考えられない。K列のある西側の地続きの日義小・中学校の校舎下には、遺跡は当然存在すると考えられる。

なお、3住居址の主軸の方向は次の通りである。

18号址 真東より北へ14°ふれている。

19号址 " 28° " 。

20号址 " 37° " 。

3. 出土遺物より

住居址と遺跡全体ともに、別表の通りであるが、灰釉陶器類・土師器・須恵器・その他の陶器・縄文の石器土器・鉄器類の順になっている。

今回の発掘では、ほぼ完形の皿が一枚出土したのみで、他は全部破片ばかりであった。陶器類の底部から推定される器物の個体数は、(低部以外で推定すれば更に多くなる)。

・灰釉陶器類	住居址より25点・住居址外グリットより41点	合計66点
・須恵器類	" 4点 " 2点	" 6点
・土師器類	" 6点 " 4点	" 10点
・縄文土器	" 0点 " 1点	" 1点
・雑器の類	おろし皿2点・すり鉢3点・天目茶碗・古瀬戸類若干	

上記の通りであり、パーセンテージで表わせば、灰釉陶器の器類は73.3%を示めている。次いで土師器の11.1%・須恵器の6.7%・雑器の5.6%となり、いかに灰釉陶器類が多いか推定される。このことは前回の発掘でも同様であった。

主として平安後期から鎌倉期にかけての遺物が多く、一部天目茶碗や古瀬戸類は、室町期のもものと推定された。わずかであるが青磁・白磁も出土しているが、後世のもの

みたい。

鉄器銅器の類では、鉄器では、20号址から鉄銃（鉄製の矢尻）が出土長さ68.4cmで巾2.1cm・重さ10gのはほぼ完形で、土中にあったため赤くさびている。

18号址では、鉄製の先きのくびれた長さ5.5cm、重さ11gの木曾山で木材に印を刻んだ「カッキリ」によく似たものが1点出土したが、用途は不明である。

19号址のF2の地点からはフィゴの炉のあった場所から重さ195gの金クソが出土している。このことは19号址は鍛冶屋場であったことを、物語っている。

銅器では、小づかの刀身の柄の部分にあたるような形をした、先きの細長く突んがったものが出土した。もちろん小づかではないが、欠けた近くに花木の浮出し文様がある。何に使用したものか不明である。武器の一部分かもしれない。

18号址からは、嘉祐元宝という古銭が一枚発見された。腐蝕がはなはだしく割れている。地金も銅分が多く緑にさびている。

G7の長方形の土構よりは、行書体の元豊通宝が一枚出土した。地金は合金で一部分金色に光っている。日本製のびた銭の一種と思われる。時代も鎌倉・室町期のものである。

（附記）

遺物のすべては、整理分類されて測量図・実測図と共に日義村教育委員会で保存している。



発掘風景



発掘調査団一同

非売品

発行 昭和56年3月31日

編集 長野県木曾郡日義村
日義村教育委員会

印刷 御安藤印刷(02642)2-2353

